

尾張志

春日井郡

和哥名所

宿

驛渡り橋

産物

人物

官舎

山川

第五門

品目	年月日	調製	昭和	年月日	黒我	第一	三	号
場	備付	文	書	目				

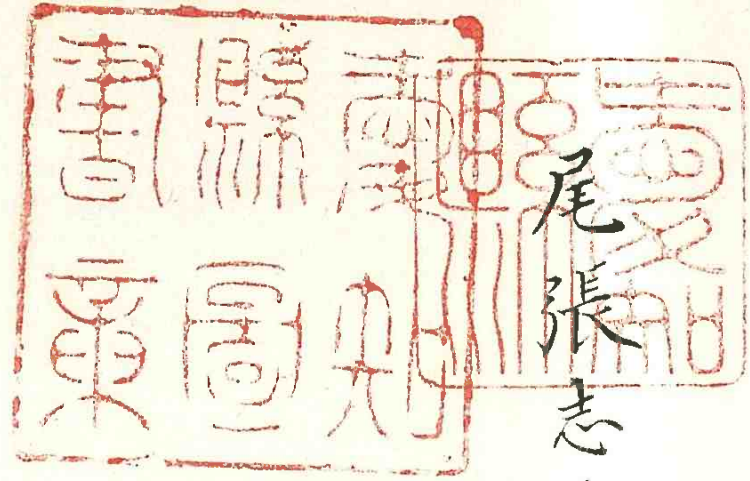
294

7

1-29/30

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 9

史編纂
和縣
係之印



尾張志卷之二十九

明治十九年八月點查章

AG0.08A294

木

A291
7
1-2/30

和果文化

昭 33.7.30 和

37358

深田増藏正韶謹撰
植松庄左衛門茂岳謹校
中尾八郎右衛門義稻謹輯
国田六兵衛啓謹輯

春日井郡

和歌以名所

但し、けりる名所なり、近世多き、
人々詩歌ふるなり、いふなり、部小哉と

清須

今の清須村とて、むかし、五條
川に流るるなり、清須のさきなり

慰勞之

却あゝびびくあひまうし優待塞ふ
 うそりなうて田面れ中あゝやれふふ
 是もどふ黒田ふうし
 家ハ家と云ふ

是より黒白あり

家ハ家ニ

けり方小類ひるく玉郡れ改とけひ
 百姓よりへて見胡あふとてれとて
 うぞ門前市とせむさうにそみや
 このあふ心地もさひ十日斗やけけ
 むまそそれよりけ所よりうひぬき寝

殿の南面とてゆふはけはみえ
 ともなひに信や人とのまのまは
 まあけゆきのまはにまのまは
 ともなひに信や人とのまのまは
 まあけゆきのまはにまのまは
 ともなひに信や人とのまのまは
 まあけゆきのまはにまのまは
 ともなひに信や人とのまのまは
 まあけゆきのまはにまのまは

文よりあけ新と川波乃

うしほふも光る 経水の月

いはとちももあえ

文の春乃月のきつふは鶴れ

新乃うねの色をむけき

柴屋宗長手記

清頃れ松窓と坂井松はちを廣

くうきく館の端でく入る柳の長

小ゆら山吹のきく池の浪水

春よりねるうきうきうきうき

かきほくくくくく

嘆さうふあふあふあふ

緑陰をうきうきうきうき

うきうきうきうきうき

も緑陰をうきうきうき

は飯ハ仲と守護所招月庵正徹

東國その記さけ筑前守亭

新雪ふかや志のめあき

龍御山

吉根村の龍泉寺山と云
よー古老のいふなり

衣笠内大臣

雨をよこひつゝそやぐらふ

多川の流山り夕立のそ

郭公

源仲正

支本抄

雪ふれ龍れ流山のあき

そとかけく啼く

も一足ぬ衣笠のわきのあけ

集ふ入るはふ今更なるは龍

泉寺ふかきちき馬ふけを

うねのせられあのかき

流尻ふけり龍泉寺のそふ

そちねの芳野もあきそふ

つのは山といふ大知人

守山

大曾根のそ
ふそ山村

吾孀の道記

もろや海にんきふと海にん様
宿いゝきと様

号海悟正

もろ山に里の名さふやふれい
うきもろふ神もふり

ふの道記やふきふり田米うり

きふき守山ふ宿ふり矢作に里

国海ふり所ふりふり記せり

木ヶ崎

守山村長母寺の
北々木ヶ崎とふ

雑談集

當寺長母小四十餘年経る因縁

きふきふりやふきふりふり不留守と

詠之
嘉元元年癸卯
十月廿五日詠之

無任國師

人ハ不和寺と元縁ふり新ふり

有之於心而不可忘

詩文

光音寺詩

萬里和尚梅花無盡藏曰尾之山田稻生
莊光音寺新主盟妙教義溪藏主織田
瓜葛招諸彦會此以蓬萊雲氣為題

海山雲氣帶春殘朝作梨花暮牡丹今日
羣仙紅會合一飛我亦始鞭騫

南陽山禪應寺眼路亭記

小木村小あり
今ハ廢アリ

小木鄉南陽山禪應寺眼路亭記

扶桑國小蓬萊正眼精舍之開山天光和尚迺
緇林之烏曇鉢也玖公老禪是第三世之正
脉加之和諸方具眼而辨波瀾之深淺久矣翁住
越之前州木寺日欲接得老禪於捧下老禪
掉頭而不肯遂無出世之華而結隱逸之巢其辨
舌激起五湖四海至矣盡矣老禪共榮□相
計卜小蓬萊春日鄒郡小木鄉而築南陽山禪

應寺其地小木之山巔而近江美濃加越伊陽
冬河等之七八州一目而盡焉故自設亭子顧眼
路就梅子某需其說子細也吁余雖未見其地
略聞人之說境致有橋有市不屑碧湘之八也
飛鳥之粘暮霞蓋活丹青乎哉一々不及毛
舉枉閣分直祝々

明應十年辛酉仲春如意寶珠日梅花無盡藏
漆桶萬里七十四歲書之臨紙如隔霧見華昏

昏不分明可自笑也

織田丹波守平常寬公碑

中小田井村東雲寺北境內小あり

銘曰

祖桓武帝家系緝光義氣霜冷功名春昌行
採聿思履蔭不忘偕以荷慶誰維相當築城
巖聳卜宅地康七萬餘日二千歷陽風播月
燭夕膳晨香田井林麓東雲宝坊噫神格矣
可敬可惶琢石之德山高水長

三住妙心現任政秀泰寧山叟銘焉

夫以織田丹波守平常寬公者其先出自桓武
天皇而十八代津田織田元祖三郎權大夫親真
之末裔也汗馬之功出羣拔萃築城於尾州
春日井郡小田井莊領下四郡且相攸于茲創
龍光山東雲禪刹為香火之地請妙心大猷慈
濟禪師為開山始祖永正三丙寅七月十四日
卒謚東雲寺殿前丹州大守開巖化元大居士

矣此知於世出世法不偏不倚常而克己寬則
得衆矣願嫡子織田藤左衛門寬故繼父遺德
而住小田井城願嫡子織田藤左衛門寬維長
大之後讓小田井城從濃州大垣城于時天文
十一年寅年齊藤氏圍大垣城其急難遠達
于小田井速策馬來敗敵軍戰死其處謚實相
院繇是父寬故復歸城小田井同十九庚戌二月
七日卒謚金龍院矣二男織田又六郎信張寬維

戰死之後為曩祖丹波守四代孫而下知尾州
下四郡住小田井城矣信長公當世之後從之
敗諸國軍元龜元年信長公與淺井長政朝
倉義景挑戰之時於江州相戰坂田掃部三井
出羽守等討取四百餘此賞於江州賜莊園天
正乙亥補和泉國守護職是皆從連年勲功賞
也信長公乘弒奪之費為秀吉公成囚人被預
淺野氏天正十五正月蒙免除入洛于時娶于

疾病為保養以淺野氏賜米二十俵同九月二
日於大津卒謚青龍院于時秀吉公以那須氏
賜賻銀百枚也願嫡子織田又六郎信時父信
張後泉州之後住小田井城天正二甲戌九月於
長嶋討死謚雲頂院于時郎從山端右京進
富田後改堀尾昌倫等戰同所死其願嫡子織田竹
千代信氏為小田井城主早世謚瑞光院其二
男織田虎千代忠辰為祖父信張之家督從泉

州也忠辰於信忠鄉前元服賜忠字并長光刀
也因信氏早世復為小田井城主信長公弑已
之後配流羽州至文祿三年免許拜采地仕
秀吉秀賴二君慶長十九年於京都卒謚
景德院于時秀賴公母儀以湯淺氏賜賻銀
百枚也其嫡子津田左馬助知信有故自是改
津田慶長年中十四歲而拜仕
大樹幕下於濃州二箇所采地拜之後奉仕

尾陽太守秩拜千石正保年中卒謚本知院
矣厥嫡子津田九郎兵衛信正繼父遺領奉仕
尾陽太守三君元祿年中卒謚得翁永入居士
兵厥嫡子津田又六郎寬教繼父遺領同仕後
擢曰九郎兵衛復登庸稱兵部加賜其秩昇輔
弼之任與聞國政矣厥嫡子九郎二郎寬皖相
緝畜家名又信正二男津田清左衛門信就時
拜采知同仕又知信二男津田權之丞信之少學

鎗頭終年不怠遂成一流之源別拜采地同仕
元祿年中卒謚一翁永雄居士矣厥嫡子津田權
之丞親信繼父遺領後擢加賜其秩同仕兵厥
嫡子津田藤九郎信章別拜秩祿同仕又信之
三男津田平次右衛門信晉歷官階別拜采知
同仕為先鋒矣時維室永二乙酉七月十四日
探支廼值開岩化元大居士二百年遠忌師
檀相共同志以伸供養一夕一朝誦諸般神咒

開甘露門教山僧導師可謂慎終追遠之至
誠勤焉檀越家特造立石碑願東雲主盟來
請作銘於山僧嗚呼吾雖踈懶而素乏文字
禪宗黨瓜葛不忍固辭拂古硯瑛於竹窓
坐月嘯風葉既就盡以家系為後序云爾
室永二歲次乙酉七月十四日 東雲主盟 盤首座募化

小田井長興寺詩

花下留客

小蓬萊 洲臺長興禪寺東雲軒辛
丑上巳會織田和州凱歌之時也

寺在清洲一里東數株無恙旧時紅主人連日

勸盃話逢又看花敏定功

東雲之主人東安藏主字季
仙織田和州其名秉敏定

古蹟の初長興寺廢地の下依見之

小牧山碑

夫小牧山者

東照神君之古戰場也初豐臣秀吉與織田信
雄有隙天正十二稔甲申春三月率十万衆入
尾州欲擊信雄當是時其父信長臣皆屬秀

吉信雄在清洲城請援兵於

神君因信長曰交許之自將兵八千而援信
雄先據小牧山拒之陣營嚴整秀吉不能前
退屯樂田曠日相持於此秀吉謀密令池田勝
入督諸軍襲三州岡崎共兵凡三萬

神君聽之留酒井忠次石川數正等守焉四月
八日向晚使大須賀康高榊原康政等以衆三
千為先鋒蹙敵陣之迹擊之而逞兵三千夜潛

與信雄出小牧山從間道進軍至長久手矣
時勝入等聽後軍之狼狽而旋旆

神君揚旌旗于高陽出其不意勝入等倉惶
成列與森長可勦力督戰

神君之兵膽氣奮發挫銳折剛連勝遂長
可指揮士卒欲衝其右軍而出其後

神君之兵機競放烏銃勢如雨雹立擊長可
墜馬伏尸其兵士崩勝入軍不利衆大潰而

父子授首諸軍遁走一戰而斬首万余級
神君須臾振旅與信雄入小幡凱旋小牧山翌旦
秀吉驚兩將之出軍馳至龍泉寺而勝入等
已敗歟矣秀吉大怒將攻小幡衆辟易莫肯從
焉秀吉自作威曰詰朝擊之乃止既而聽
神君之舉錯拊手歎息以為文武兼備之良
將也班師於樂田遂引兵退于濃州伏惟自古
受命創業之君其大義大勇必有見稱于天下者

漢光武濟昆陽而敢殺百萬之王尉唐太宗屯
栢壁而追破精銳之宋金剛是也夫秀吉者不
世出之驍將也攀其鱗者羅熊之徒也
神君視之如草芥故以少兵援信雄于危難
殪勝入等於一戰而卻秀吉之大軍矣其義
大勇遠賢於漢唐之英主天下稱之曰殆天
授非人力也而後受命創業克寬爰啓万有
千歲之洪基

聖子神孫繩々綿々乃續麟趾之化美于嗟
夫神哉方今

尾州太守中納言從三位源綱誠公者

神君之曾孫也南面之暇亟望小牧山州城
之北三里惟本邦之勝區也頗思

神君之功烈而不已今歲元祿十一稔戊寅冬
十一月樹碑於茲地畧叙其事以傳万代其繼
述之志不律哉詩曰駿惠我文王曾孫篤之

太守之謂也臣徒拜首而承

嚴命記之且獻銘曰

巍然名山上直下豐蓬島揚波膽吹攀空
維邦藩屏蜀險秦潼起々武夫桓々英雄
威起疾雷氣吐長虹良平失策晉楚折衝
三軍手裡百万胸中勝入授首秀吉卻衆
昆陽推勇栢壁讓切仁懷豺虎義制蛟鼉
惟非人力乃代天工歷世具瞻于泰于高

殷周垂統魯衛守封親賢樂利遺澤流風
神君之德帝出于震大勳什一鐫傳無究
元祿十一年戊寅冬十月日 尾陽詞臣并河子健百拜記

清洲詩

甲辰紀行 寬文四年

平巖仙桂

殊方總不迷長路避東西喧噪羣鴉舞勞
耕瘦馬嘶筍抽如小角樹列似柔薺紙筆
徒雖缺清洲坐欲題

官舎

小牧御殿

小牧宿

伊奈府御邸園小牧宿
清洲御殿
延和寺
瑞龍院君寬永二年清洲創建
伊奈宿

荒居御殿

荒居村より一里許り
水野山に康徳の時
帝を移し一里許り
瑞龍院君より一里許り
浦々を移し一里許り
一府志より一里許り

坂下御殿跡

水野一色村にあり 寛永年中

源敬公明神を移し地より一里許り
と捕りたり一里許り
一府志より一里許り

朝宮御殿跡

春日井原入康新田より一里許り
源敬公より一里許り
今より一里許り

水野御殿

上水也村のうら水也川よふ山の麓ふらうて
水野ふり麻袴のうら以殿と建ふたふい
し今水也氏の宅地とて今も以麻袴の
うらかの宅ふやうにあらう

水野役所

中水野村のうらむら水也山麓麻袴のたふ
上水野ふり殿と建ふたふい水野氏と
りふて此村のうらふて愛智春日井ふ

郡山麓の事とて名も金の世にあら
る御林奉りて此の下官殿人あらうてふ
代もこの案内とてあらう

清須陣屋

清のふれ方中条郡のうらふ六角堂村と
あらう

山川

小牧山

小牧山の西より一名を飛車山とも云ふ
松林竹叢生ひ茂りて四時華の色をま
る絶頂甚高きところにも平原の地に
獨立しこれに國中を眺めしる風景に
あはれぬ香具山といひしやうの國の家
まきと云ふ

岩崎山

小牧の山は方一里いづふなり山上巨石多し
奇峻目と驚しに杉屋敷の隙に合せる云々

白山

雪口村より丹羽郡のさしれ山なり
山上より南に名を冠す山城と云ふ
一帯
大山の城ふれ方より入る大池と云ふ
一風来はふと云ふ山は新なり

名とも又鷹ヶ石山林とも

大山

大山村より峻険なる山なり児権現の
社あり不動の瀧あり是大山川の水原に
系色よりいふ山なり礪石と云ふ土産
乃部よりいふ山なり

内津山

内津村より頂上内津社の麓院なり

大石と磐石と壇と石と石と水湖の
海干ふとて増減と昔人奇と東と
れ方、長流の可児郡池田村とて
と霧降と目録とけふとあらと
其日、天候晴と里俗と池田の胡弓
内ばかり夕嵐とて

弥勒^カ嶺

神面村の南迫間の山とて、
此可児郡^{ツミナ}系村との境とて山麓、鞍骨嶺
とて、其日とて、山下の神面村とて、
大谷の林とて、山下の神面村とて、
菩薩の小堂ありて、

外^ハ原^{ハラ}山

系村ふとて、迫間の林とて、
美濃の三倉村とて、山頂ふとて、
老松とて、

國堺とて是も地廣く上の伊豫中の伊豫下
乃伊豫中一わたりて下は伊豫下林のなり
毎曉風起て東より吹たりとて未明風
やわらき日ありは風を晴ぬとトウ
遠くより里人伊豫の秋風をひきく

三^ミ國^{クニ}嶺^{タカ}

片茅村にありて尾張之河原濃三國のま
く新加名といひききく風系

雲^{クモ}見^ミ峯^{ミネ}

上品野村と赤津村のありふりて峯と
東の三河の賀茂郡といひききく四方に
眺めくづひなつて霧を雲と見えぬ山乃
名をうりて又雲見山の麓田あり
も雲信の山なり此山も松杉茂く古
跡ありふりて古道とてききく
河原のありて都人のありて

ふもねもいふれいふるもあふるも今
雲見^{クモミカ}嶺の沙林く人々那濃利蘓和歌集
刑部少輔平雅連 神ひいてやけきねね
平見ふふく哉無念の経

毘沙門峯

赤坂村ふらうくむくけ地多門天の堂
一の名はけくくく山くくくくくく
すくくくくくくくくくくくくくくく
蝦池^{エミ}城迫^{シロハサマ}間の沙林く人々

水野山

水野村のらうく山くくく其地廣く
里巨石多く中水野村くく山くく水
門滝くく上水野山樋^{トビ}の次く石樋くく
大盤石の面く極くく水の流くく人工
くくくくくくくくくくくくくくく
水野村の内ふく眼鼻石く人々眼鼻
くくくくくくくくくくくくくくく

山林多し十餘ヶ所あり

當國山

下水地村あり尾張戸神の志づきあり山
ろく尾張山と云ひてかくみひききし
東谷山ともかきく山にすゑ石窟乃
岩あり跡多し里人神代人の住し石穴
のしほひ多し古墳の石棺ありり
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

小金^{カ子}山

上水登にりて延喜神名式山田郡金神
社と云ふ神の所まはるる山と云ふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

春日井原

味鏡村の北方一園ふと地甚廣く味鏡原勝
河原と云ふ地甚廣くや原と云ふと年と連く
畠と云ふ田につくく五穀と云ふと村と

春日井原新田味鏡原新田松河戸

原新田

洛川原
之地

卷之四

源敬公春日井系小磐持一治ハ告天子と
捕一尾関跡を奉つて中へ供奉
と一ひてあらへぬく寛元
と一あづかいの御事とて友と
と一井系とて御事とて中へ記せり

勝川原

味鈍原

上条原

下条

原ハ子ハ一國ハ

春日井原より、河を、曠野より、みな
新田より、今、河を、村里より、

誓詞野

二子村より伊奈藩前手当國檢地せし
 其下吏のまじり地を極約のまじり
 なる所なりけり里老の証しあり
 依り給なりと云ふ

玉野川

玉野村の東より水源ハ美濃の多治見
川より土岐郡十三嶺の谷より日吉川を
ひくひく流れてこふ所又東の方より水野
川より流れて谷を當國山の西より
上志原の谷よりひくひく流れて半里
より西岸より川中より大岩並ひより
川中より廣く流れ接する屈曲浅深あり
漲る瀦水多き所或は底つゞく所も

よりやぐりより流るる岩より流れ
て白雪と似たりや浦人々老松怪木枝を
て風系に流るる所太鼓岩 鶏石
狸ノ瓶 獅ノ岩 亀岩 羽衣岩 瑪瑙谷
傘松 蛇ノ洞 杉ノ外 杉ノ奇 椿五十
よりあまの谷 信濃の岐 蘆川の源 京上 杉の谷
又大和の芳野川の東に流るる所より
らに流るる所 國界一の風景より 鹿乗

川平カハヒラより小名江より活津林山なり
勝カテ川

玉中川乃下流より龍泉寺山のまとの阿
より景より水よりなり

味鏡川

猪川の下味鏡村の南と流より川中
より梅々枇杷等ふいにありありなり
名を名内川より

大山川

大山村の流と水源より南西の方より
林野口より数村を過り小牧の東の方より
川南外山より西の麓より合流する
村のふより新川より西の麓より
下末村の南よりなり

内津川

内津山より山名村出川村より数村より

根谷村より玉中川より

雨澤川

上中田川村の奥より流れて玉中川に合流する
地を西へ方より定光寺、法興寺のふもと
玉中川より

矢田川

矢田村のふもとより水源は、新井川、山口川、野
田川香流川等の山川より、根谷西へ流る

ふもとより大川より、根谷より、稲生のお
うへ庄内川に合流する、毎年夏季
のころ、各庄屋の武士、旗幟を放ち、或は馬の尻
軍陣の備え、多し、旗幟を放ち、出張と云

小田井川

根谷河川より、味流川の下流より
尾張風土記の残缺、大井田川に合流する、
ふもとより

木津川用水

丹羽郡本津村より岐穂川の水を分けて瀬川
より水と南より東に本津村より新川
より五里程村より田に用ひる
入鹿用水

丹羽郡入鹿池より東方神尾村より大岡と作て
池水と南西の方へ引きて味鏡村より其
四里程の村より田に用ひる

新川

本良村の北東より西の方平田阿原の
の南と流るる南の方小流と海東郡
上中下と蓋津の東と流る四里餘より下
一多村より一色川と輻湊して庄内川通連年
の流る砂と川底より雨海水の時
激浪流る堤とそこより小田井大井と
め数十村年々水害なり年穀不熟の憂ひ

是より天明四年水野千之右衛門
源明公より水災と雖も味濃村
の西の方より堤長四十間程半を切らば谷
目より高水と大蒲^{カマ}沼へ水一新川と
堀割暴水とあり長損害のりひと深
けり其切らばと洗^{アサヒ}堰^{セキ}とひいて大きく石
籠とを築き堅固と爲しと事あり
〜執政間宮氏より冬國政人見氏より

備前閘

下小田井村の西より信ふ二ツ村よりむ
〜尾張より閘とあり水とたけり法ふ
〜のち中務郡一宮のち播磨國
赴きこゝに信ふりて程あり
〜ふき名年中伊奈備前守當國檢地
せし時木造り法と氏ふ教へり閘と般若
閘とありと記しありけり

つゝと後所く小造りもみかき信ふ
あゝと天明や年新川堀割に水筋た、
しづれは海無間不有とて今もつふ其
形らのと砂り

鞍骨坂

内津村と西尾村との間ふ天手はそれ何
わゝゝゝゝ

安戸坂

お中村と今村との間ゝ坂を風景は是並
わのゝ海もく東海道の依りの中ふこゝゝ
いゝゝ今村の城ゝ相原下総守廣長とお中
の城ゝ永井民部が陣とけ地と今我と廣長
おもけて何れとて中里老のい傳へるゝ

蛇池

比良村の南東の方より織田真記小清洲東
十里餘有比良城佐々内藏助成政守馬城

東有堤南北甚長堤東渺茫蘆葦茂矣正月

永祿二年

安食村福德里人又左衛門者自比良

並往大野木村過尼池堤日暮雨甚見大地

數圍體在堤上首臨於池聞人聲而回首面

如鹿眼如星舌似火紅又左衛門驚悸逃去

到大野木村語之公信長公也聞召又左衛門而問

之翌日欲毆地令比良大野木高田五鄉及

安食味鏡農支持鋤鋤并汲桶自池田四方

而汲水漸及數刻然池水猶尚不涸當是之

時公欲入水底而見地橫刀於口以入水中

少間浮出云不見地有鵝左衛門者善入水

因使鵝左衛門入水中然亦不見地故公還

清洲見之池池名之曰地池

濁池

新田村之河川田中用水之水常不

少濁

黒池

九埤村より寛永三年の夏ひどく
く乾水で、南村平田寺の傍晦岸西
に池ふいに沈んで老翁とて
泣き回し、大雨降ると國中より
黒池龍神より陰曲ふに池の
まへに

大蒲沼

大津本村にありていりき沼なり織田真紀

小比良城東有隄南北甚長隄東渺茫葦葭茂
矣、此地に常小水不涸不毛の澤地なり
近年新川出来、水けの用とて人沼と
して、則ち水源とす

生駒池

小場塚村より今更々田なり、其形のふ
く、生駒東、水けに池ふて、幾
なり、今更々田なり

地藏池

猪川村ふらり側小地藏寺あり池の名は

蟹清水

小牧村よりて蟹多き名なり長久の頃合
戦の時冬河の流將のちりり岩の底なり

養老泉

印場村ふらり寺院の部ふらり志す次

天狗岩

内ば山の中より高数十丈天よりひへり

~~~~~奇状なり

天狗石

水ぬれ山中ふらり其とき事数回あり  
り奇峻なりめふきなり

狸々岩

玉川の名ふらり其色むく赤き名なり

馬蹄岩

西尾村のうら内は社に多くあり  
沿うり石上馬の蹄の跡はよくわき日本  
武尊の系なまひ馬の足跡うきとみ傳へ

宿驛 渡橋

小牧驛

本多路の三橋名を屋より三里館又小牧より  
善師也等三里館あり南より山へ所家老  
つらう南より下町といひそのと中町と  
其おと上町と片町と云々内商家農家  
ほろろ旅泊人馬舎所あり正事記小牧  
昔小牧山の南の麓

今元小牧といはれり  
小牧山



教公清代小山より東の系に梅され御殿を付  
く並に梅の今の小牧の宿名也と記し御殿  
寛文七年丁未小牧藩の市と記し御殿と記し

内津驛

下御道の宿驛より町屋御殿の家のわ村果の  
際と合せるとし

清須驛

兵濃路の馬路に清須城の隙と合せるとし

枇杷嶋橋

枇杷島村の西より庄内川に渡り臨厩小寺目井  
郡枇杷島の橋長百十一間  
東大橋六十九間中嶋十三間西小橋二十九間 元和

八年癸亥村民より掃除の料を賜ふ蓋此付新ふ  
橋より渡り酒井文助河野庄助友田忠公  
永田清公より至今より下小田井村の田舎長道  
より為料地と記し是より小橋より水の後  
源より清水の宿城と名を記し注をより

月あふ昔新波に建ちし一みとく一きこ  
く水きく堤橋よりあふるは彼まを流る  
流るらん諸奉り下つるふ出流る事と云ふ

### 水野橋

中水野村より定光寺 清和院の御道筋  
から板橋より流る橋よりいふ處より

### 白木橋<sup>シラキ</sup>

下郷村より昔伊勢の流る城より安堂屋に新

とくしきふ鴛鴦の水に流るはけりて橋  
のよりより水より雄多一羽を討ち小牧乃  
旅館よりて橋より一とて調をせられし  
けふそねのあふ女入来りてまをわひけり  
一とて水より流るる雄多の流る  
首級よりとてその女より誰よりぬて彼首を  
携へて流るる見るとあふわかつてあふ年又け  
橋とて又とてわけるを新波とていふ



雌鳥あり雄鳥に首をねのちに接して死したるに  
まづは虎の影をいそよの影のあるやうに今又この  
矢のふゆをうき一雙の雌雄をうきと射ぬる  
もみ使ふもくやうにやうにうきをい  
るに菩提のふく一寺をある建ち白弓山駕藏  
寺と名づけ彼にあら矢をもくやうに珍重の國の  
く其寺の上の山に廢れ今にいはれ其名の  
砂のりし里光法師よりききし年藤堂の侯津の

城拜領ありしころ江戸参府本より路通の  
るに清須河より小牧河までゆくて  
と人馬の往来の便ありや今に通の  
るに家中にたまに供米するものあり山田奉  
るに今に通のり清須より胡日下郷中郷  
茶師寺藤原の村とて經て小牧より小道  
と今に後堂河までゆく

往還橋

如安村よりうむうー清瀬より小牧へゆき  
せー清瀬ふーうーなるーなるかゝる名はけー  
うーうー今ハはるまじり

### 稲生渡

稲生村のお店門の船渡ーうー小田井村  
大井村は良村おれ村ふーなる渡ーち紙  
うーなる秋の来ーうー春の来ーうーはづとかく

### 味 錠 渡

安井村のお味錠門の船渡ーうー本多路れ  
大道味錠村へて小牧渡りなる又なるも  
ゆき

伊奈府より帰國ハ收獲地と伊奈路の船  
船渡り架ーなるうーうーはづとかく

### 勝川渡

勝古村のお店門の船渡ーうーはづとかく  
川村へて内は渡りなるうーうー稲生味錠



の西渡りふ回

大日渡

志原味村より渡り大日堂より名  
つゝ長久手軍の討池田信輝入道の渡り  
より新渡りありて騎馬渡りありて  
今ハ藤木庄新村迄ありて西渡り

西行堂土橋

小牧街道より井原新田よりありて

堂ありて西行法師の本像と安堂なる  
ういほあるの清水より流るるを今ハ橋の  
例より同じく名をせむと一岐法師といふ  
寓居より一やいひ傳へる此法師の法衣  
と経歴とをいふハ標集抄西行物語等乃  
古書とある一たれど尾張よりある一  
るるにありてありてありて

新川橋

土器中 新田の西より新川より下りて 収獲し天  
明四年新川堤崩れしより 今に至る

### 稻生堤

稻生村の北より大堤なり 春のには野に人  
来りて酒肴を携へ 糴席を設けり 阿比の  
しむき風系にあたりて 人々もこれを楽し  
又東の方光音寺村の河原より 毎年秋のには烽火  
に官人揚火をうけ 壯觀なり

### くふつもの

### 磁器

皿 茶碗 花瓶 茶壺 酒壺 土瓶 土鍋  
のりいよ 瀬戸村より 砂鉢  
甕 飯筒のいよひ 赤津村より 磁器  
品 野村より 磁器 大瓶 多し 磁器  
出た 土瓶 土鍋 土瓶 土鍋 土瓶  
土瓶 土瓶 土瓶 土瓶 土瓶 土瓶



下総陸奥備前長門肥前等東西の土  
國所々々焼出たる陶器々々ありて  
瀬戸ありて今此瀬戸村の産と云ふ

延喜式或祚大嘗祭の条尾張國所造甕モクヒ八口缶五

十口管坏四十口甕ササ八口釜十口短女坏三

十三口酒甕ササ八口ハニサ匣十六口片坏四十口陶

臼八口タカサ餅ササ八口高盤四十口ホ柑十二口都

婆波十二口酒ササ盞十二口酒垂八口と云ふ

日本後紀の殘缺弘仁六年正月丁丑日五

造瓷器生尾張國山田郡人三家人部乙磨

等三人傳習成業准雜生聽出身と見え弘

仁式小應供神御由加物者所司其注所須

物類額シ前ラ申官八月上旬差宮内省史生遣

五箇之國造河内和泉一人尾張參河一人

備前一人到國先後而後造作焉と云ふ

如曰  
物由

しんぞく雑答のりょういふたそめ

延喜乃民部式元年料雜器尾張

六寸各  
碗  
廿口  
五寸各  
盞  
五口  
四寸各  
中  
斂手子  
十口

杯  
十口  
徑各  
三寸  
甌  
十口  
大  
小  
四  
六  
口  
口  
一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
電  
數  
一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

昨午村に十二口  
の磁器を焼出と記

一 府志 古窑名 平窑 小長 曾窑 前坂窑

吳窑 大洞窑 五葉嶺窑 窟山窑 橫嶺窑 曾与

木平窑 八幡平窑 三窑 真木嶺窑 帆立窑

秋坂窑 山中窑 内倉窑 志天木窑 長曾窑

川廣窑 新挾窑 烏嶺窑 躍平窑 蓋松窑 城

嶺窑 高橋窑 梨木澤窑 神座木窑 峰窑



光窑 瀧窑 南洞窑 小玉石窑 山桑窑 苴  
蒲窑 白嶺窑 神田窑 長曾嶺窑 右三十  
九窑在赤津山中今存數窑 馬城窑 椿窑  
小屋嶺窑 萱原窑 保天嶺窑 大缺窑 松留窑  
奥窑 守宮窑 板屋窑 山野洞窑 右十一  
窑在瀬戸山中今存數窑 といふくさう 陶工  
乃え組加藤四郎春慶のものといふれ人物乃條  
にあらす今せえぬく 一 南京様漆附乃磁

器在津金胤臣

俗稱父  
以衛門

工支に亭元酒

年々 瀬戸のやき 試みざるが土の摸 根菜  
 のか減おといふくそく 得るく 瀬戸村  
 乃陶工を以て二男民吉といふ者 土の細合焼  
 方の秘案を練熟し やき始めしより 其新製  
 の竈 瀬戸に十七口あり 赤津村に二口 南  
 京様と多く 新製すくくも 竈数定む  
 又高瀬手は 磁器ハ下品を村定数とす

よの文政五年より焼くもの多しを村  
おてやう南京様高瀬手河とて上品とて  
一産物とておとむるもの本業の陶器又  
南系様高瀬様も公用の品物とて  
將軍家諸紳家より御進めとて実  
に諸國產の魁品とて行基焼磁器ハ  
春日井郡を以て郡ふとも土中よりから  
たもの場々おとれ色よりてすき乃

ふとて東へん壺の如き行基のやう  
おとれもの甚多しとておとれ人或高買れ  
利潤にせしめて諸々の酒甕とてより  
いらふものけつとておとれもの  
茶の壺とすれものやうなもの  
けつとて中にもなるもの土に埋  
めたるもの人場おとれものみよ底つたもの  
けつとておとれものけつとて酒甕とてより



旗竿

けりふのふおきやう

猪川村より出た天正十二年長湫陣の時  
神祖より出た名を問ひしに猪川と  
申すに答へたるに殊に御喜びなりと吉  
兆とて此旗竿に代りせしむるに今  
も此旗竿を旗竿の跡とて有り  
甲申戦闘記に

家康公云云八日子の刻天正十二年四月小牧を清公  
馬よりて市久田村豊場村如意村を清  
過破曉の頃勝川村へ清着陣しきり  
勢く清馬を休めしむるに郷士長谷川  
甚助も其に清成きき甚助と云ふれは  
清原地名に清原あり別あやと云ふれは猪村  
の名に吉兆とて清に清湯漬と云ふれ  
は旗も揚げるに清原の年と云ふ

らるる物具と此地ありかゝるをせられし城  
の上陣羽織と其助ふりト夫より小幡と  
進ませ給ふ  
此州の古吉例にありし旗竿  
と赤川村より年々差くる其川  
沿ふ地を院と云なり其名の所を  
此地に於てはひにあり今小年其水浸り物と見ゆ

蘿蔔

落合村の板郷宮重にいつくを名産  
年々將軍家へ献せ給ふて當國乃大  
根ハ他國に輸れりとも宮重ハ産を分一

と大松平秀雲ハ弊帛集り種蘿蔔説あり  
又いふ尾張蘿蔔冠天下其大者数斤  
色如珂雪味甘如飴四方之人爭而買之以  
充方物馬州之西邑有業種蘿蔔者其所種  
者信大且美云云文長けん  
畧す貝原篤信ハ大和本  
草に蘿蔔云云尾州に種をむ他邦  
に種子を傳へ種れり尾州の産は不及  
云々云々物類品隣り尾張宮重菜菔伊



勢日野菰めこもいふ名産なりと云を  
東都に持ふ初年の積産なりと云を  
年と経れハ形色より小豆大なりと云を  
一他國より甚貴なりと云

### 茄子

蓮花寺村よりつる世に蓮花寺茄子と称  
し少くとも味勝なり蓮花寺村より亦  
最合六郷より一所あり

### 蘭席

小田井村より出る俗に小田井表と稱し  
諸ふ小豆の近村皆蘭と稱し席と稱れ  
とも小田井の其名なり

### 鞍鞆

味鏡村よりつる俗に味鏡肌と云ふ

### 茶

内津山より出り献上なりと云

松茸

水野乃ひ皆掛半田川赤津おの松林中  
うゝは是亦献上うゝ香味うゝふり俗  
に東山の松茸うゝ

牛蒡

平田村うゝ作根甚大うゝ味良う松  
平秀雲が弊帚集ふ種牛蒡説うゝ此村乃  
牛蒡を堀うゝ作うゝ文うゝ

雲雀

春日井原乃ひ勝川の原ふ多うゝうゝ  
鶯鶯うゝうゝうゝうゝうゝ名産うゝ

泥鰌

新居村うゝ出づむうゝ

圓覚院君を養ひ流しうゝ村民名産と稱す

祖母懷土

瀬戸村うゝおの陶子の用うゝ懷土也今官禁



なり傳へ云唐四郎、祖母山野と見え雨池  
洞より受りて此土と得懷アキラカりて歸り  
所名もてて程人物の不記に塩尻に藤  
四郎、此より祖母懷の土に當所瀬戸の村の内  
にあり國禁に命ふりていゝ事と  
不得又青繪青色の焼付此地不産の物とて  
異邦より渡り青繪に此より色あけ  
しとせり

### 岩崎石

岩崎村より大石あり慶長十五年  
東照宮西國に諸侯に命りて名を石の碑と  
築くめりて時より此石と云く石恒とせり

### 小金石

水野村の小金山よりわら色白く磨き石碑  
にせり

### 白石英

本莊山より出づ水精ふ似て少や六稜なりて  
石より出づ生く盆石なりて平賀鳩溪の  
物類品隣ふ白石英尾張本莊山産上品云  
と云々

礪石

大山村より出づ農人鋤て磨く時これを用ふ

桃

西尾村より山野に多し暮春の頃ハ山あり

谷に咲くとき見るとなりて実大きき  
味も名古屋より里伝の傳ふむ  
西王母より傳ふなりそ村と西王より  
後ふ今れ字ふ改りたりと云ふなり信  
か

李

外魚村より李の大樹多し味美なり名物なり

箕



玉夢村より出づ里人等々を繋ぐて四方より

石弩 ヤノイシ

平賀鳩溪が物類品隲に尾張三洲山産中品  
とありて古今醫統に石弩即砭石之別名  
也とありて和ふやのぬいしと云又本草綱目  
啓蒙に石弩砭石れ附録ふ出づ矢の糸いしと  
和産云尾州三洲山ふ出り

桔梗 アサヒ

當郡れより忽野ふり延喜式尾張貢藥  
のふ桔梗り本草正論に尾張の産云  
今山野ふ生るゝ其根細く茶店に所謂  
楊枝手是より性味甚佳とありて海東  
郡根高村の人津田正生りわけり尾張地名  
考に當郡の吉根村ハ桔梗村ハ桔梗村ハ  
色一とありて其に今も彼系より一に  
ありて記せりうけざりけむ又ひさかた

とらねーいひたふやふーと  
て後の考とあり

### 烏水晶

赤津品野名れ山ふましたにけり色ろー  
くやる灰に埋みく大氣れ透るたを出入て  
く海せの多やふ露ーと真の水精とあり留  
青日れ小日本國有青水晶紅水晶烏水晶  
ふーにけりけり和産と異國と称せり

### 赤小豆

當郡乃ひ丹内海東中島諸郡れ材ありて  
作る用藥須知に和名ありと数種ありと之  
も赤小ほろりかづき又尾張わづきと稱す  
この色不甚赤少帶灰色味極り佳し此  
を上品とせしとあり今もせありと小粒に  
て赤色多しとあり此にけりありと大粒あり  
色よく上品とせしとあり又尾張小豆に



戸あり、大納言小豆くまひ

# 中将菊

尾陽雜記に引ける正徹、自記に云く予、  
十二歳の年よりやらむ伏見院の御所  
いづづつ殿より萱御所より移りたる  
一その御所の御所はゆせに菊少将  
菊よりゆすふに大なりと思ふなり  
くくくふにぬるんと思ふなり

とつふにゆきて四十餘年をゆに  
人の御事にては乃御所よりゆき  
花をたぐり事とておれり  
け菊尾張國山田より所よりとて  
名ゆかきゆひゆひゆ  
春日西洞院の草庵よりゆき  
終人かきゆきゆきゆきゆき  
くくくくゆきゆきゆきゆき

すこし大それた中將菊の名をいふに  
あつて奇よむ人ふきんぞいさけ  
つちの海をせし十六七年にもあつて  
亨徳元年九月九日右衛門尉あつて  
げんぞいさけの海をせしに

君又さういふ事にはなほあきらまじと  
 思ふ

[illegible]

尾張志卷之三十

深田增藏正韶謹撰  
植松庄左衛門茂岳謹校  
中尾八郎右衛門義稻謹輯  
岡田六兵衛啓謹輯

春日井郡

人物

内藏頭小野朝臣道風



小野氏系圖

群書類從小  
の印行本

敏達天皇七代以孫系議小野峯守の長男筑  
前守葛絃れ子道風正四位下内藏頭と云々  
麒麟抄 曆應年中大宮  
亮良經編選 道風者尾張國上條  
しと云々此人右京大夫葛絃れ子息也  
嫡子道風次男元風三男伊風女子一人なり  
手書也其中以道風為第一云々麒麟抄  
附録道風寛平五年誕生

村上天皇康保三年十月辛七十一歳従四位上木  
二頭内藏頭と記日本紀畧康保三年十二  
月廿七日乙亥正四位下行内藏頭小野朝臣道風  
卒 七十 麒麟抄附録の記と云々たう  
け物に能書高名のて技業畧記百係抄等  
ての教百部れ古書ふと云々今松  
河村道風の四孫なり上條は隣村也  
原太夫高春



春日部郡司天野信景人物志より  
吾妻鏡、壽永二年三月十三日壬寅尾張  
國住人原大夫高春依召奉上是故上総介  
廣常外甥也又為薩摩守忠度外舅雖為  
平氏恩顧就廣常之好背平相國去治承四  
年馳奔關東以來偏存忠之處去年廣常誅戮  
之後成恐怖半面邊土而今廣常無罪而賜  
死潜有御後悔之間彼親戚等多以免許就

中高春依有其功本知行所如元令領掌之  
可抽奉公之旨被仰合云々見たり  
山田次郎源重忠

山田村の人々人物志より十四卷系図  
小山田先生重直子山田太郎重満より重忠  
山田二郎見え承久記小東海道十萬餘  
騎東山道五萬餘騎北陸道四萬餘騎三の  
道より十九萬餘騎と進せり東山道北陸





勢よく馳走はし御方と待しゝるゝ  
河も不渡軍とては去れし御方の勢少く  
池邊に河の端よりきて向の馬をみ河を  
そ欲し御方山田次郎御方と御方ハ誰  
欲し御方と御方尾張國の人山田次郎重  
忠とてゝ矢合しゝ終るゝわれ少  
山田次郎山田次郎、御方とも水野左  
近大金太郎大田五郎兵衛藤兵衛伊豫坊荒

左近兵部坊是等と始しゝるゝ  
れ端より下て散るゝ戦ゝ其中小大弓精兵  
数多ありゝるゝ河中小射とてゝ流るゝ  
りゝ痛も負ゝ引退者もありゝるゝ中も此  
丹内ハ後しけゝ鞍れ若手渡りゝ尻指し  
被射けゝるゝゝ保るゝるゝ後あり  
真倒ふゝるゝ流れけゝるゝ佐賀羅三郎真甲  
の被射けゝるゝ引退ゝ波多野五郎尻もな



き矢々々其々真甲れ候と討てて引退く  
大將軍武藏守河端より立ちて軍れ下知  
せしむるも負其意く見参り入城申す候  
見えける所も負ける者矢折候と睨  
く氣色もなほ涙も待たず不顧  
敵は渡す東國の兵如雲霞續きつれ  
とて山田次郎諷して落しけり云  
伊具六郎有時、手者伊佐三郎行正山田

二郎と目よりけり、小脇に彼方端も此方  
も草の生えたる所もつるゝに馬れ走り足  
踏もつて倒れ小脇にけり山田二郎強  
敵より落し、伊佐三郎馳りてい  
者も山田次郎を思ひ、君はたも伊佐三郎  
行政の名を鑑へ候、落し強敵  
て引退間敵は方々を不意に山田次郎  
留も下人より伊佐三郎難色一人具たり

自ら軍を率ゐる家へも傳へてくれお合時々立れ  
き見お一戦のれを休めぬ家へも傳へてくれ  
角も一戦のれを休めぬ家へも傳へてくれ  
尉も一戦のれを休めぬ家へも傳へてくれ  
思へて返して上げぬ家へも傳へてくれ  
者一りお寄て寝てぬ家へも傳へてくれ  
けもおをぬいて馬より飛りて主と己  
馬小槍のせりぬ家へも傳へてくれ  
伊佐山田曹れ

甲と付んで引くけぬ家へも傳へてくれ  
曹れ緒をうけて引く山田延忠伊佐付  
らぬぬ家へも傳へてぬ家へも傳へてぬ  
伊佐高名も傳へてぬ家へも傳へてぬ  
新美濃れ小園も傳へてぬ家へも傳へてぬ  
てぬ家へも傳へてぬ家へも傳へてぬ  
むぬぬとぬぬぬ云々山田次郎  
家へも傳へてぬ家へも傳へてぬ



事れしと申す云々海道に先陣相模守  
時房同六月十二日勢多の橋にて野路不  
陣と云ふ早雄<sup>ハヤリフ</sup>れ者川路に即ち  
足<sup>ス</sup>れ橋中二間引落て掻指掻き山田  
次郎と始し山法師大勢陣と取云云  
去程より東方に勢の中云云山田次郎重  
忠四辻殿へ参りて某に歸来しと云ふ  
中<sup>ナカ</sup>に武士共と是より何方へも落ち

し門も開けて不意に入られし山田次郎門  
下敷て言ふ大膽者の君に滑りたり  
是れ死にせんすといふ言ひける云云山田  
二郎は差我れ奥より山へ落ちけり或は  
乃<sup>ナ</sup>端より是伊豆守伊豫坊下敷て水と  
りて飲て腹を不修たりと氣あはれ  
山田次郎われ等より付功德善根とせし  
言ひける云云伊豫坊大乘経書





九日頼朝より又風流なる人なりし事ハ  
沙石集ニ尾州ハ山田次郎源重忠よりハ  
承久之時君レ侍方ニくあれ一人也弓矢  
の道人ニゆまれ云心もや〜〜〜民  
レ頗る思ひ出りより侍人等も所領レ  
内ニ山寺法師なり〜〜〜とぞ  
け〜〜〜思ひ出〜〜〜我人  
心で思ふ〜侍も〜思ふ人等ハ情

乞ふ〜思ひ出〜目も〜或付彼等  
大なる〜わ〜ゆ〜〜〜りけ  
友ハ御尉が〜〜拾ひ〜侍ハ作  
付〜此科料ハ七匹思ハぬとや〜  
ハ等〜〜海〜〜思ふ〜  
〜〜〜侍ハ〜  
〜侍ハ〜此等七匹思ハぬとや  
〜ハ〜〜

中けり主れふと知る縁を海にせり  
相違不審のこころありしつゝ進  
せんとしむるにあらざるも  
捨りれ減半分の得るやそれ所ふ  
しれあり枝つゝとて系譜を述す  
也  
や  
も承久記と同一なり  
甚思記ふとて安かき

吾妻鏡承久三  
年比多ふと云

山田次郎重廣

源平盛衰記より平家物語に治承四年卯月  
九日頼政高倉宮より中へ諸國に  
源氏揃めうらに美濃尾張より山田次郎  
重廣河邊太郎重直云々とあるなり

山田伊豆守重繼

二郎重忠の子也事い重忠の陣より

山田太郎重満



十四卷系圖小二郎重忠其父は川邊冠  
者重直に多しに見えたり

葦敷二郎重頼

山田に一族に安食もかけり

和名抄山田郡  
安食郷

重頼後出家し常觀坊といひ府  
志しつゝ十四卷系圖浦野重遠二男  
重頼葦敷二郎といふ重頼子重高其子重  
行葦敷二郎佐渡守し重高弟重能葦敷

二郎といふに吾妻鏡に重能と重義と  
といふ人あり

安食太郎重資

源平盛衰記及び平家物語に治承四年卯月  
九日於改郷高倉宮へ移せし諸國源氏  
よりこれに美濃尾張より安食次郎

重頼其子太郎重資同二郎重隆

平家  
物語

少く重隆  
と省見えたり

水野小三郎重清

水野村人人物志よりたう十四卷系

國小川三郎重房子重清小川又三郎

見え吾妻鏡小小河兵清尉重清より

同一人也

尾陽雜記小小河又三郎重清云云後  
移尾陽水野遂以水野為稱号と記す

水野藏人貞守

水野村人人物志より

浦野兵庫允重遠

源平盛衰記及び平家物語に於て

源氏に於て諸國に源氏ありとみれ

る浦野四郎重遠よりたう十四卷

系國に鳥羽院武者所佐渡源太重實の子

重遠浦野四郎信濃守尾張國浦野より

源義家朝臣等と記す

織田大和守敏定

小田井村の人武衛に麾下より南方記傳



に宝徳三年辛未冬十月將軍の母堂慶壽  
院斯波千代徳丸の家へ織田大和守、訴論  
の口入をせしめて許容するふりなり是より  
み差裁へ隠遁する梅華無盡藏の浴堂  
長興禪寺に會花下留客の題せる詩の細書  
小織田和州其名乗敏定とあるなり南  
方記傳に訴論の口入とあるは中原康富  
日記に宝徳三年九月尾張守護代所望之

織田事可返遣千代徳殿之由云々とある  
守護代所望と許容するなりと口入せし  
まへ慶壽院のうらみでさうがへ隠遁せし  
れはあきなりおのち擔にさるるなりとあり  
足利家の政令にさるるのなりとあり此の  
將軍母儀のさるるなりおのち擔にさるる  
なりとあり口入と不用  
ある千代徳丸のへ訴論するは天竺庵直  
れにさるるなりとあり尾陽雜記に三郎敏

定ハ上四郡の守護織田右馬助敏信入道常  
世ハ父也ト云フ

織田大和守信武

人物志ハ昔井郡小田井城主ト云フ由小記  
信長記ハ天文年中云云其頃ハ尾張ハ郡々  
半分ト云云下四郡ハ織田大和守ト知  
清洲城ハ武衛公ト居申我身  
ト城中ト云フ守護ト云フ

織田太郎左衛門信張

人物志春日井郡小田井城ト云フ由小記

津田家譜ハ織田彈正左衛門尉久長ハ二男

丹波守常寛

小田井城主

其子兵部太輔寛故

田小

井城主

その子太郎左衛門信張小田井城主

ト云フ天正年中信長公ト信張ハ和泉半  
國ヲ賜フ岸和田ハ城主ト云フ小田  
井城ハ信張ハ嫡孫竹千代信氏ヲ賜ハテ三



萬六千貫文と成し家督す

信氏の父又八郎信直信長公の妹嫁す

天正二年九月廿二日長崎より 信張、天正十五年秀

吉公より肥後八代に城を賜りしと評

し、八月俸千俵より文禄三年九月

近江國大津より死せしと云ふとあり

織田大和守達勝

織田真紀小織田大和守勝秀男大和守達

勝相尋治尾州下四郡在清洲城而任武衛

也然遼勝匪重職之器常好醫術欲求鶴毒

以害之故所逐不知其後ト見元尾陽雜記

小織田大和守達勝大永にころ清須在城

より下四郡より護り義達斯波義と補

佐よりしとあり

松原下總守廣長

今村に人文明五年今村八王子に社を創建

し、未津に万徳寺小寺願を寄附し其院

文今も万徳寺に在り或ハ云永井氏ト合戦  
一ノ害也ト云フ府志ト云フ未津村  
万徳寺所祀ト古本ハ聖徳太子傳五卷  
ありト云第一冊ハ奥書ニ尾州山田郡内  
飽津保上村於太子堂寄進之松原下総守  
廣長寛正五年甲申二月六日壹貫四百文目  
田地同畠万徳寺ト永代令寄進者也ト云卷  
下ハ奥書ト云フ又此人乃位牌なりト

陽常院康貞王安居士ト見エ裏に尾州今  
邑城主松原下総守廣長文明十四壬寅五月  
十五日今明和九年凡至二百九十一年矣  
ト云フ舊き牌ト云フ明和九年に修  
造セト云フ

### 魚住隼人正

人物志武衛家麾下之士春日井郡康田  
村の人ト云フ人物志ハ諸家陪臣ト云フ



に魚住隼人春日井郡北野村前田利  
家、臣と見え、武衛家之ひてのち前  
田家と見え、成

落合右近將監勝正

上末村人二宮に神主重松秀村に三男  
陶城と築て居り織田家より孫今村  
民と見え、尾州二宮大縣  
神社、神主累系

秀益

重松兵庫  
助應永比

秀満

次郎太夫  
永亨比

秀村

中務丞  
文明比

神主属斯波  
義廉勤武彦

秀永

神主左京進  
九十八歳

正平

板津中務少輔始仕織田彈正左  
衛門尉後仕池田家子孫在彼家

女子

倉地兵庫今妻

秀春

神主喜三郎  
八十八歳

勝正

落合右近將監春日  
井郡上末村城主

秀富

中嶋郡妙真寺所縁に建武四年二月  
廿三日、古終、小落合左近太夫と人

見えくり同族の人々くー落合氏ハ春日  
井郡落合村より出たものくー海東郡多  
郡より落合村にきてくーそれよりわくー

### 大口右京進

春日井郡麻田村の人武衛麾下の士也く人  
物志よりくたれく定くく神社に於て考  
まくー大口の地名より中郷郡より郷を  
さけんく其所よりくー前飛保村曼

陀羅寺所蔵の天文九年二月廿七日の賣券  
状小賣主小村久野玄内右妻支澄人大久地  
又五郎よりくたりけ大久地氏同姓の人とや

### 平田伊豆守

同郡平田村の人きも武衛麾下の士よりく  
人物志よりくく歴尻小春日井郡小田  
井庄九拜村平田寺ハ同庄平田村の領主  
平田伊豆守某香火の道場

伊豆守平田に  
寺殿よりく



て台宗守之りゆりや云平田伊豆守は  
斯波家ハ一族りり云傳へけりも其名を  
嗣せり日記小博き人云正せり見えたり

### 紫田七藏家親

同郡田畠村ハ人今川麾下の士也府志人  
物志等小見りたり廣井八幡社天正七己卯  
歲十月廿五日造營ハ棟北小大檀那紫田  
七藏家親りり信雄卿從士分限帳り百

六十貫云云紫田七藏百七貫云云同人云  
新りりりり今川ハ麾下りり織田家  
に仕へりり

### 藥師寺刑部大輔道元

同郡野田村ハ人りり人物志に云り  
陸奥小中村流ハ元親云云今川左馬助  
氏豊ハ仕へり名古屋ハりり藥師寺刑  
部大輔道元

春日井郡  
中田村人ハ女ハりり男子ハ

生じり云々云々云々

安食次郎左衛門

同郡福德村の人云々人物志府志等

小い云々

津田孫十郎

同郡小幡村乃人云々此人の云々後の古城

これ云々

長谷川大炊助藤原重行

人物志云々春日井郡小幡村の人云々始七郎

左邊云々云々塩尻に長谷川

大炊助重行本氏應永二十一年尾州山田

郡神云々

今春日井郡山田庄如意村也

是越中云々

信濃宮云々忠云々人也云々日書れ

如意村六所明神云々云々信濃寺に

開基ハ長谷川大炊助藤原重行云々永亨

八年十二月十七日奉八十八法名月山宗圓云々



号す是に就中官方石黒氏に——て嘉永年  
中當國に入し此里に居り今相城地なり  
家系今府下れ石黒氏よりなり又浪合  
之記に官方殘黨れしより長谷川大炊助重  
行越中因名子れき相山城より石黒城中  
重之子尾州春日部郡如志に居す  
記し

### 丹羽修理亮長政

児玉村に人信者より信ふ丹羽氏より武藏玉  
の児玉黨也中む——右近將監長忠尾張國より  
つり世に當國に在る武衛家よりは——藩翰  
譜よりしるす此氏を児玉——武藏に地名の  
しるす

### 丹羽五郎左衛門藤原長秀

長政れ子長児玉村より生る幼名万千代九十五  
歳より信者より信ふ一方に大將とあり向ふ所

為歸とていふ事なり。元龜二年近江に佐伯  
の城あり石を賜ふ天正二年十二月公筑前守の武士  
に古きおれそとて家入等に名のてせき  
は惟佳と改める公を給ひてのち丹羽  
備前公英信忠に事わりてのち姊妹三河原  
成と君とす。信雄信孝と後を。長秀  
若狭國の近江の滋賀郡高島郡とて居る  
時天正十年の春秀吉公筑前守とて

とていふ時か幣一切りて。中領れ  
若狭國の神倉なるか賀國の中二郡とて  
ていふ事なり。神倉なるは乃て石五萬石百万  
石又ハ七十万石と欲す。ていふ相年以積聚  
とていふ事なり。盡むとて長秀憤りたて  
いふ事なり。我いのちとて。とていふ事  
なり。のち。とていふ事なり。とていふ事  
なり。とていふ事なり。とていふ事なり。



よき事なりと出づるれども  
飛のこゝ前よりいふおのゝ  
背中に刀れりたる流り長き  
筆より事なりと書きし後  
いふはいふなり書きし後  
いふに積聚の由と流り書きし  
もいふなりと流りもいふなり  
いふと流りもいふなりと流り

相違なりと流りもいふなりと流り

長考けし返事なりと流り今いふなりと流り

いふなりと流りもいふなりと流り

えり多門院日記天正十二年四月

十四日長考後より同十六日死にたり

なりと流り

水野右京進

河村れ人信長公より

岡田助右衛門

小幡村に人織田家より傳へ来小豆坂寺本  
鎗の一人より後末森村より傳へ沙羅  
本又名古屋に世傳より岡田子市岡村に  
人その一族なり

岡田伊勢守時常

浪尻小春日井郡山田庄大永寺村古ハ川村  
の地なり  
大永禪寺ハ古寺の四路也川村産岡田伊

勢守時常大永二年小再建一ト栢悦道

仙和尚ト中興第一世祖ト云々ト身ハ元

尾陽雜記小岡田助右衛門二男善同庄五郎  
伊勢守

其子善政將監豊  
前守云々星寄城主長門守為

信雄ハ穀才名五郎守之云々ト云々ト

佐々内藏助成政

代々比良村に任人や太閤記より佐々内藏助  
成政元ハ尾陽春日井郡平ノ城より後



信長公越中の守護小封せしに先君に  
恩懇と云はれども一々信雄卿秀吉卿  
と評極まりなき者一時信雄卿は味  
方に与り越中より義兵と發し秀吉  
卿小敵對せしに見たり

### 佐々孫助

信長記の天文十一年小豆坂合戦に際し  
佐々隼人正も才孫助十七歳云一騎當

千共可謂兵るれども若干の敵と只七人  
——と撞立追返——云勝鬨と云たり云  
後まで小豆坂の七不徳とて兒童の口まで  
止まりたり是れ同記の弘治二年八月の福  
生合戦の事と云はれ佐々孫助山田  
治部左衛門尉武者大將——と云ふ軍  
の色と云ふ是れ——早孫助治部左衛門  
尉と云ふなりと云ふ

佐々隼人政次

信長記、隼人正、織田真紀、天文十一年八月十日小豆坂合戦に佐々隼人政次、孫助、世稱謂小豆坂七本槍。

磯村左近

水野村人信長公に侍、人物志、右近。

柴田七左衛門

田畠村人織田家、侍、信雄卿從士、分限帳、百五十貫、由、計、柴田七左衛門、百五十貫、同、人、合、三百貫、也。

小関源五左衛門

上中村人信長公に侍、人物志、源左、



山田弥右衛門

山田村の人也織田真紀小信秀之築城於  
古渡居焉使山田弥右衛門掌糧食財用  
之信長記之信秀以二男勘十郎殿  
之云山田弥右衛門府屬從之

永井民部少輔

上田中村の人信長公は

不破源六

一色村の人信雄公は天正十二年竹鼻  
に城をもち秀吉公水攻めし  
守り得しと傳ふ信雄卿没士  
分限帳に二千六百貫一宮一色不破源六  
と見え太閤記に天正十二年五月十日不  
破源六居城竹鼻に押寄云水攻め  
しと見え源六かへしやひん一合を  
賜けり云云

助けられ城を讀取一柳市助と城を  
入る事なり

### 不破萬作

太閤記の秀次公高野山より切腹の事記  
恠死せし人より秀次公より先に切腹し  
公の侍衆錯愕しけりし事不記万化  
生國尾州  
十八歳 父母よりけりし柳小次郎  
忠義なれり

流しにせられし事後記にありし事  
いたしこれより後記にありし事  
當郡の人より出た事なり源六は同族  
なり

### 稲熊市左衛門

清洲村の人信雄公に仕へ後名古屋小奉行  
人物志より稲熊平左衛門市左衛門  
梶田出雲守家信



松田村令久寺所藏此梶田七之助忠家繪像

忠家の子孫を云ふ當寺の厨子の扉に裏書し梶田七之助忠家

田氏七之助忠家者出雲守家信之子也加

治田家信初に加治田隼人仕福島金吾家老之時ハ号梶田出雲守者其産尾州

春日井郡築木村之侍也曾仕福島左衛門

大夫于時天正年中依太閤秀吉公之下知

福嶋正則公加藤清正等相与有朝鮮征伐

之後雲州家信從之焉有軍忠其後慶長之

初於濃州関原發軍功其時忠家十歲而供

父无比類發武勇因茲正則主深感其勇凶

賊亡而國治後

東照大權現公於正則賜安藝備後于時正

則於忠家与采地一千石无幾程病死其子

等從祖父雲州歸本國前常德寺惠玄忠家

子也依有病氣出家焉高田宗也其子作吞

者繼禪法于横地氏為檀越今作吞為全久

寺住持元來忠家依為曹洞之法流從其緣  
納此像於全久寺 此像於藝州廣島入喪  
時所画之也其後及十七回忌賴尾州政秀  
寺親山和尚請贊于時天和三癸亥年三月  
十一日施主惠玄と云々 家信、信之知  
知、是より人物志に春日井郡下市橋村福  
島正則臣と云々 又福島正則家中分  
浪帳小橋田出雲守武千三言或石井と云々

拾人と云々 に出雲守と云々  
の々新助と云々 府志に云々

塙九郎左衛門

比良村人信長系はへ大坂本村の城  
信長のころ原田備中より改む大坂より戦死  
より石城より部小安より記す

塙茂元

紹巳、富士見道に記に清原より小牧へ



ゆゑに明院より高野に  
ついでに先へも飛移りて義元  
より禁裏に近き院出でて  
元は義元を誘はんとす  
小牧山に禁裏より  
義元明院迎ふなり  
明院は北野に  
連兵陣をとり又於大野木義元  
より軍を召し水をつゝみかゝり  
とすや大木木下境ありとす

叔安王創業源氏小牧の戦ひ  
連兵陣を召し水をつゝみかゝり  
とすや大木木下境ありとす  
田見桃斎藤氏北中より  
義元と戦ひつゝ字に似たり  
事終りて如く塙氏  
大木木下境ありとす  
義元と戦ひつゝ字に似たり  
事終りて如く塙氏

### 席田君迹近

續日本紀云靈龜元年七月丙午尾張國人  
外從八位上席田君迹近及新羅人七十四

家貫于美濃國始建席田郡焉と云々て迹近  
尾張人なりと云々ては國席  
田と云々地名なりと云々此處より  
わが當郡に岡田村あり此處より  
きふれいなりと云々席田シロダといふと  
後世より岡田といひなりと云々岡田書  
院シロダといふと云々此郡にありと云々補ひ記せり

### 生江臣安久多

續日本紀天平感寶元年五月戊寅尾張國  
山田郡人外從七位下生江臣安久多獻當  
國國分寺知識物授外從五位下と見え新  
撰姓氏錄小生江臣石川朝臣同祖武内宿  
祢之後也云々と云々

### 川瀬連名とも らせり

塵添埜囊抄に昔尾張國春部郡國造川瀬



連ト云ケル者田ヲ作タリケルニ一夜ノ間ニ  
藤生タリケリ恠<sup>レ</sup>恐<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>弃<sup>ル</sup>事モナカリケ  
ルニ其藤大ニ成ケリ其故此田ヲハギタト云  
ヘルトカヤ此事ヲ菅清公卿尾州記ニ云  
ヘルニ其藤漸大如<sup>シ</sup>樹遂号藤木田云ヘリ俗  
ニ藤ヲハ波木ト云ニコソ  
訓ルモワロカルヘシ此田ヲハ  
木田ト云ト云丁ナルヘシ 云云ト見<sup>ル</sup>ニ今<sup>ノ</sup>波木田ニコソト  
云ルハ非ナルベシ前文ハギタ  
云云ト見<sup>ル</sup>ニ今<sup>ノ</sup>波木田ニコソト  
云ルハ非ナルベシ前文ハギタ

### 三家人部乙磨

日本後紀の残缺弘仁六年正月丁丑<sup>五</sup>  
造瓷器生尾張國山田郡人三家人部乙磨

等三人傳習成業准雜生聽<sup>ニ</sup>出身

加藤四郎春慶<sup>俊慶</sup>

源氏村人等々道元和尚小法入宗  
陶器の法を傳へて歸り源氏村に傳へ陶  
器々開く今源氏赤津に二村あり磁器と

製する事多し加茂と稱するは皆春慶、  
後より府志より悉く揚陽岸に住  
吉郡般若堂村常陸常塚に系に尾張國  
瀬戸に藤四郎加藤四郎  
入道春慶永平寺開祖道元  
和尚小陸ひ唐より彼國に土を取來り  
て茶入と焼くをいふ事と名づくは  
所死ふのそんて其土を携ふ便此所小埋  
所ひてととんたり

### 加野和泉守

享祿に熱田に宮圖と書し画工と清須  
より任一人也

### 溝口左京進

熱田に寶お懸おれうら天満大自在天  
神の奉納書に尾州春日郡熊野庄住人  
溝口左京進時元龜三年壬申七月六日と  
見えたり



尾張宿祢弟廣

尾張宿祢安文

尾張宿祢安鄉

三代實錄、仁和元年十二月廿九日己卯  
尾張國春部郡大領外正六位上尾張宿祢  
弟廣男安文安鄉二人始自中男迄于不課  
惣計課役進調庸物安文年十六調絹十疋  
七尺五寸庸米十二斛一斗五升中男作物

油一升八合徭分商布百五十二段安鄉年  
十五調庸徭分同之先是弟廣申請自為郡  
領三十餘年于茲矣僅有二男曾先一藝編  
戶云民无地息肩骨肉云情不勝收淚望請  
在前進納特免後役詔許之云々小針  
村云々今ハ知事が

# 物部宮守

續日本後紀小承和十二年十二月甲午尾

張國山田郡人内藏少属正六位上物部宮  
守改木居貫左京六條四坊〜尾張人  
のふがとに友佐と〜此時木居と京師  
〜新撰姓氏錄に左京神別に物  
部石上同祖〜石上朝臣神饒速日命之  
後也宇戸志麻治命十六世孫物部連公麻呂賜物部朝臣姓改賜石上朝臣姓  
尾張氏〜同祖〜山田郡〜  
〜

尾張宿祢藥

續日本紀に神護景雲二年十二月甲子尾  
張國山田郡人從六位下小治田連藥等八  
人賜姓尾張宿祢〜小幡村小針村  
等〜居れ地〜

日前金里

朝野羣載に著駄勘文に云日前金里年十九尾  
人張國贓物壹種准贓布陸端壹丈云云永久三年



十二月廿日云々  
盗賊云々  
又愛智郡柴田云々  
日割神社云々  
合云々

中條小一郎

太閤記の中源小一郎傳小永福に印ありて  
多し戦切重累せし其家ハ長子十二三  
歳のハ是と看せ給ふにたのみ入付  
と近所下方左近岡田町名裏の所に入

是より一かむ一切をやり十人一人な  
 らる其のふし應せりりりり十六歳の  
 もかむる太刀おとひるるるるるる歩  
 るるるるるるるるるるるるるるるる  
 海津合戦小室<sup>ハナヤリ</sup>初法をつるるるるる見え  
 るる下方ハ上中村岡田ハ小幡村れ人るる  
 甚近所ハ居候りり人るるるハ物諸れ  
 将可熟得之事りりりりりりりりりり

早〜対云尾州より織田酒造三郎中  
系將監云々中系の進退のあはれを要て其  
約と變てはるも中〜其言をう〜る〜  
云々〜河分將監の日人歟曰族は

平手中務大輔政秀

信長記小細後守殿尾州那古野〜云所〜  
要害と稱へ嫡男吉法師及を入進〜る〜林  
新五郎平中務大輔云々と家老〜〜相

信長〜云々〜見云安土創業録〜信長の朝  
著武藝と考〜ふ〜と他事と忘て我意に  
〜云れ〜行路不正先考〜も不存なり  
き乳母人平中務大輔政秀是と嘆き年  
月諫之尽至諫云々又五箇の陳書と捧〜云々  
政秀の陳書と捧け〜も信長用ひ給へり  
〜我領地志賀村へ引入政秀の家光山田久四  
〜云け〜者〜使〜〜河分和尚へ書〜を



一々諫言逆耳故某自害仕候乃何ん心と  
ある所もや作らん云云信長は  
を同流いふて馬に馳せし汝  
一々角の事をも多し其れ改考所本  
よりいふはしきなり何んや言上  
は是も信長今より汝異見不可得所  
す一々改考是は後いふて後  
文字を捨てて死にけり于時天文廿三年甲

寅に閏正月十三日に曉行年六十二歳或六  
十歳

一々聞えける云是より信長は死す

て撫育民國家戢治んといふ外他云云

一々記す信長記に諫書五ヶ条に文をわけ

たり長れいふ省けり織田軍記織田

真紀もけり記に詳畧のけ創

業記にむきし又連歌師宗

牧、東国紀にも織田弾正信秀

禁裡に修理に依るに作し平手中務丞  
政まうのりや神妙お進細云と云はれり  
宗牧、尾張へありし、而も那古野に下着  
平手おむい云云一座鳥羽のり云云於恩  
亭に移去所障のり有り平手お思ひまし  
きり内儀よく貴方のみやと云云云  
とらん武邊の義氣のみやと云云と連  
なともいふと用ひ文事と云云と云云

男ヲコと云ふ也

平手五郎右衛門

信長記に平手中務太輔に子とあり、嫡子  
五郎右衛門尉二男監物三男甚左衛門とあり  
けり五郎右衛門尉名馬とおく、信長公  
亦も之を所し某の武勇と云ひけり  
先之とけりふふと進らせり尾  
籠よりと云ふなり、志保に創業派真紀



中も同く一男甚な爲り名  
を記し置る

### 下方左近

人物志小春日井郡上野村信長記の小豆  
坂合戦の条小下方左近を時ハ流三郎  
十六歳云云此人ハ一騎當千共可謂云云  
只七人トテ撞立追返一萬死一生の勇戦  
免れ勝鬨と上りて云云後云云小豆坂

の七本流とて兒童れ口より止ありけり太  
閤記に岡田助右衛門尉、傳れらるに永祿の  
初下方左近將監六度柴田修理亮共同  
岡田助右衛門尉四度ト云云ハ皆家初代  
の事なり

### 道家清十郎

人物志小春日井郡守山村人父尾張守  
住守山ト云云織田真紀の永祿五年十月五

入右京進賴隆ト萬里小路亞相惟房ト以  
そふそふト奏問ト三好松永等ト弘通  
とありんト日本國を信長にふられ  
綸を賜フ則

勅使ト賴隆尾張へト降リ惟房云云  
問尾州知己者姓名賴隆曰道家尾張守者  
其祖先事光明峯寺道家賜名字称道家司  
濃尾參三州獻調収祖其子孫世為尾張守

其家衰不能任守近年属織田備後守信秀  
自幼仕信長巡封内至冬在尾州道家雖不  
在其婦常侍于信長呼之安井足合之言云  
二十四日賴隆發京云二十八日到清洲道  
家氏云道家遽令供饌云道家氏奉戴綸旨  
丹心宗奉云以語妻云道家告狀於浴盤中  
信長  
浴湯  
山中久次道守  
勅使御藏立入右京進賴隆奉



天子與<sup>リ</sup>日本國<sup>ヲ</sup>于公<sup>ニ</sup>綸<sup>旨</sup>來也<sup>ト</sup>公欣悅名<sup>ニ</sup>安  
井<sup>一</sup>云汝須將<sup>命</sup>云道家<sup>ニ</sup>常學禮義故有備焉  
云綸旨賴隆奉持焉賜物道家將來<sup>云</sup>十一  
月<sup>云</sup>賴隆久次告歸京<sup>云</sup>二日未明發清洲  
經伊勢歸京<sup>云</sup>織田軍記の元龜元年  
九月十九日淺井朝倉等攻<sup>ム</sup>小谷<sup>ノ</sup>宇伏  
山の城惣攻<sup>メ</sup>て<sup>一</sup>討死<sup>セ</sup>人<sup>ノ</sup>數<sup>ハ</sup>中<sup>ニ</sup>に道  
家清十郎其<sup>ノ</sup>助<sup>ハ</sup>十郎<sup>ト</sup>始<sup>メ</sup>て<sup>一</sup>松<sup>ノ</sup>と<sup>云</sup>

討死<sup>セ</sup>云道家兄弟<sup>ハ</sup>一入名<sup>ニ</sup>譽<sup>レ</sup>剛<sup>ハ</sup>者  
なり生國ハ尾張國春日井郡守山<sup>ハ</sup>人  
なり<sup>ハ</sup>爲<sup>レ</sup>軍切場數<sup>ニ</sup>て信長公<sup>ノ</sup>威  
狀<sup>ヲ</sup>賜<sup>フ</sup>の<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>道家<sup>ハ</sup>始<sup>メ</sup>て<sup>一</sup>云  
信長公<sup>ノ</sup>自<sup>ラ</sup>弟<sup>ト</sup>と<sup>ハ</sup>樂無<sup>ク</sup>及<sup>ビ</sup>道家<sup>ノ</sup>書<sup>キ</sup>  
わ<sup>ハ</sup>織田真紀<sup>ハ</sup>同<sup>シ</sup>  
多<sup>ク</sup>道家清十郎弟助十郎等共<sup>ニ</sup>槍下<sup>ニ</sup>戰死<sup>ス</sup>  
道家兄弟尾州守山人也昔年武田信玄來

攻東美濃高野口時森可成肥田玄蕃先鋒  
相戰於山谷際道家兄弟取首級三公甚優  
賞焉取道家所插小白旗親書天下一之勇  
士六字賜之此日插此旗云々云々云々  
の文字云々云々云々信長記の故を合衆に  
示すも軍記真紀と同一云々云々云々  
おれ文字ハ軍記と同一云々云々

道家助十郎

人物志春日井郡守山村の人云々云々云々

堀場越後守正義

人物志春日井郡小本村の人云々云々云々

小川平左衛門

人物志春日井郡小本村の人云々云々云々

云々云々云々

小田井太郎左衛門

人物志春日井郡小田井村の人云々云々信





諸家の馬鞍の五幣と一揆に奴系集録  
 時と鐘とを必りとわき見ると諸家  
 の小帳水次古書尉と名未十六歳と  
 方けり面もうも敵の中つゝ無入五幣と  
 新色して諸家とて捧ぐれ其恩貴と  
 己いれ願ふとせし杉あまたとやひん  
 耀衣も新けちなり新希代の振舞  
 て後代とも名を知らるる物の類とや

王肥周防

松尾治左衛門



山口惣左衛門

人物志、春日井郡、安井村、人福、正則

片、つゝ、つゝ

毛受茂左衛門

人物志に、春日井郡、福原村、人共、先祖、毛

受村、紫田、福家、片、つゝ、つゝ

毛受庄助家照

太閤記、小毛受、福助、尾州、春日井郡、福原

村の人より、紫田、福原、勝家、に十二畧、其、

事、後、小毛、福原、一、万石、の地、を、領、

素、性、信、篤、古、風、を、守、母、に、孝、あり、福、

家、敷、小、の、折、良、舎、兄、茂、左、衛、門、尉、より、大、忠、死、

と、い、ふ、其、名、を、わ、か、す、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、

窪新左衛門久綱

蟠川親元記、一名、寛正、六年、記、小、寛正、六年、九月、二日、云、

同國、申、前、尾州、一、宮、窪新左衛門尉久綱、同國、小、

牧庄

万壽寺

住人守護不入所也各太刀金三百

疋進上折紙

小牧庄に從人といふ

れ小牧村といふなり久保一色村

其居地といふ人物志小久保平尾

といふ人といふなり窪久保田氏といふ其

新録といふ

御園五郎左衛門

康正二年造内裏段錢并國役引付小寺實

五百文御園五郎左衛門及尾張國御園村

敷在段錢といふ清原御園村人

屋妙興寺一所在在院状のうり應永二

年七月十日御園光宣に寄進状あり同族

此人より又文安年中御番帳に在國府の

うり小御園村といふなり久保一色村

所家といふに在國府といふなり

山田右馬允明長



山田重忠れ一族の武士なり河石集り尾張  
國山田郡より右馬允明長と云俗なりなり  
承久の亂れ時京方よりて瀬川の戦ひ小疵  
ありし時よりて歌ふなりなりてやまて武  
士共多くしものなりぬ友達二人ありてそ邊に也  
てかけし時ありてかきとよりて孝養せん  
とて軍の場より見給ふにありしやひなり余  
よりいふに絶なりしと云ありしなり祇の中に

かゝるなりしと云なりしなりはなりなり  
祇にありしなりやけなりと云黒衣なりなる僧一人  
横食よりありしなりと云草れ系よりなりなりはなり  
れなりと云腹より腹の中より血有りなりなり  
て身もかりなり他よりなりなりと云なり  
なりと云横食業師よりなりなりはなりなりと云武士  
なりと云かゝるなりと云横食よりなりなりと云西條  
のたよりなりなりと云なりなりと云なりなり

以下文  
長きなり

中寫甚兵衛入道紹勢

尾州清原の生々尾陽雜記の生々

秋山新兵衛

尾陽雜記に甲州秋山新三郎の元尾州生れ  
人也小牧新三郎の生々小牧より出立ぬ  
信玄秋山より一秋山新三郎の生々  
老後萬可無く一秋山新三郎の生々  
勝頼の生々一秋山新三郎の生々信忠の生々

小三郎教坊守母勝頼母堂飯沼頼茂女小奉公

セーお妻の生々女房の生々

小瀬二郎次郎清長

信長記の長寫山徒被攻于事の生々

公の侍舎兄津田大隅守同舎弟八左衛門尉  
は田市令助信成の生々此人の生々不返の生々  
て付死の生々かゝて一揆の如原の生々  
きゝぬけ撞ぬけの生々



高小鶴毛も馬小参る武者只一騎のみ  
にりて追掛なり張るあひ迫る如く  
馬を放ち彼より来る者五六人あり我も  
多しれ敵も切きづるふ如く失ふけり  
敵味方あつたれ大別の志や誰より者名  
さうゆゑに唯今付き合ひ  
津田市令今信成れ乳母人小小瀬之郎次郎  
清長と云兵也是程小振舞ふ者れ何とて先

に最後にいふはさういふ事ある其は  
多き起りて自由な人云療治さか  
へ居りけるおも誰彼討ち合ひ  
戦ふて関へ信成も討ちあひ  
か細小参るも成果のうそを念らん云  
一所ふて討ちあひて場なすも真如れ  
何とてさういふはさういふ力なり  
さう起るもの具に馬よりあつたれ





いふや云云於某義を考ふ事ありと  
いふれ、諸家義と感し、重く云ふ事  
あり云云忠義深き者なりと云ふ事あり

太田和泉守牛一

信長記の序に左府

贈左大臣  
信長公

の事、太田和泉守

牛一と云人なり、尾陽春日郡の人や、近世  
至治に帰する其切後代に傳へんと欲し  
て、粗記一行、漸く重累して、教帳の云云

と云、政秀寺傳記に太田和泉守と云人  
は尾州春日井郡の内山田、名、天台の常  
觀寺と云ふところなる者や、長還傳に  
信長にへ遅く奉公せし者や、信長公の  
事ありと云、細く知れども、云云と記せり  
天正記に牛一と云

小瀬甫庵道喜

兼穂録に童蒙先哲、尾州春日井郡人小











大明神且那富野左京亮高友敬白天文十六  
年九月吉日とありてしるすに付れども此の方  
以田圃に富野左京亮高友敬といひ候へり  
此より考ふるに居候の人とて一歳田軍  
記の弘治二年檢々合戦の条に林兵作とて  
市右衛門信長公自身是と付れ給ふ云々富  
野左京亮といふ富野左京亮といふとて  
信長記に曰く合戦の条にも小幡守山とて

追討に付り給ふ二百餘騎とて討れける中  
に云々富野左京進といふ高畠左衛門とて  
取らるる記に武藏守信行の方人といふ  
戦に付れ給ふ人といふ

### 曾呂利惣八

塩尻小篠木庄出川村に彼者曾呂利惣八  
といふ盗人あり是の時信スツハといふ云々  
子孫本おねといふ少年信長公に在り







と年八十七遺偈小曰

一漚浮海 八十七年

風休浪靜 依舊湛然

沙石集雜談集と著る 寺に傳ふ 府

志より 雜談集

於尾州山田庄長母寺草了  
沙門無住七十九歳著す

に愚

老ハ嘉録二年丙戌十二月二十八日卯時薨す 有

也先人、愛ふ今此里に生れし者ハ大果

報れ者あり 云人あり 此に先祖漁倉に

右大將家小正信 寵臣なり 言へ共運を

て矢亡し 了ぬ仍其改継する 十二歳に

付漁倉に僧房小住し 云十八歳に

出家し 云二十六歳菩提山にきて 如形東

寺の三空院の一泓肝要傳了 其後東福寺に

開山の下に詣り 天台の灌頂谷の合行秘密

灌頂事の次に傳ふ 傷く 開山に恩溥也 云

當寺亦有因縁故歟相通なり 四十三年無縁



の寺常に絶烟火鉢道具之外無資財畜云云  
夏ハ麦飯粥云々云々 命をつぎゆ 愚老病  
魑万事不階れ中ハ老子の云々 禍れ中の  
福云々 麦飯粥云々 命をつぎゆ 愚老病  
述懐 云々云々 命をつぎゆ 愚老病  
老を渡えき粥云々 麦飯粥云々 命をつぎゆ 愚老病  
早く因縁云々 万事心ハ不滞事云々 誦之  
人ハ不滞事云々 元縁云々 命をつぎゆ 愚老病

云々云々 命をつぎゆ 愚老病

### 僧天澤

織田真紀に天澤者宗天台再闡藏經學德  
之僧也見武田信玄於甲州信玄問何國人  
曰尾州清洲東味鏡邑天永寺僧也問信長  
行狀何如曰甚勤武事每旦調馬後學弓於  
市川大入鳥銃於橋本一已劔術於平田三  
位云云云々 信長公ハ行狀美云々 對人云々

くはるる

# 盛禪和尚

りく遠州周智郡の人なり大草に福巖寺  
より道徳なりその園田村に藤城宗八と  
云者なり強壯勇悍なりて盜賊を業と  
爲し蘇呂利なり其黨類多く追利の人と  
なり延徳元年の夏疫死し其黨の長も  
盛禪和尚と傳へて炬と乗るに棺と奉る

すふ青天俄にかき曇りて雲深なり  
雷雨車軸と流るる忍垢せりなり  
く和尚炬と乗るに圓相とありて曰  
く世諸佛亦如是 歷代祖師亦如是  
天下老和尚亦如是 汝亦如是我亦如是  
棺とありて下りて曰

翡翠踏蹴荷葉雨 鷺鷥衝破竹林烟  
棺より徳坐して動るる山のみく須臾なり



て天竺和尚晏然と見え、その関者感賦  
せしむるなり

### 天山和尚

三関に正眼寺ふ、後をけは正眼寺ハ、伊村  
より

源敬公天山と崇信と、屢山門、来歴  
ありて終る禪と、後より、和尚と、  
羊を飼て食し、土皮のふくも

あり、其真率なり、かゝる、  
る、馬と、騎と、むと、

敬公様ふ出て見たまひ人を、  
いふ、馬より、あり、正眼寺と、  
て、その、なり

### 陰陽師元太夫

味鏡村より、年中、事故考に春日井  
郡味鏡村、陰陽師十人、何れも万歳を

とむ其内元丈より下者ハ先祖陰陽師石田  
新保興より云々の如く

敬公より云々流ハ中鷹狩元丈より云々名と賜

より仲より祝儀と勅めありし今

中絶より其家代より元丈と稱より云々なり

小田切傳之丞忠近謹圖

小澤啓吉列根謹書



愛知県



1103286167